深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **それぞれの詩の「起承転結」の構成について、確認してみよう。**

【答】 それぞれの詩の「構成」を参照。

▼ポイント▲ 必ずしも一般的な「起承転結」で説明する必要はなく、むしろ前半と後半が分けられ、それぞれの役割が分担されていることに注意させたい。そのさい、転句は詩の転換点というよりは、前後をつなぐ連結器的な役割を果たすことが多いことに気づかせることで、「起承転結」のより深い理解を得ることができよう。

言葉と表現の解答例

1 **次の漢字がどのような意味を持つか、漢和辞典で調べてみよう。**

(1) 尽（一五〇・4）　(2) 辞（一五〇・8）
(3) 催（一五一・3）

【答】 それぞれの詩の「語句の研究」も参照。

▼ポイント▲ 漢和辞典については、できれば複数のものを生徒同士でつきあわせて調べさせるとよい。

言語活動の解答例

1 **それぞれの詩の舞台や誰に呼びかけているかを比較し、どのような違いがあるか、話し合ってみよう。**

【答】 送別の詩では、別れの場面で目の前の相手に呼びかけており、別れの心情を共有する時間を大切にしたいとの思いが見えるのに対し、望郷の詩では、「涼州詞」は遠くにいる相手に向かって、自らの孤独な心情を訴え、「静夜思」は、呼びかける相手は明示されていないものの、月を媒介として故郷にのこしてきた人を思う心情が背景にあることを想像させる。

▼ポイント▲ この活動で重要なのは、漢詩もまた送り手と受け手が存在して初めて成立するコミュニケーションであることを認識させるところにある。送別詩であれば、その主目的は送別の場において送別する者に対するメッセージを発することであり、例えば現代の送別会における寄せ書きに似ているとも言える。ただ、寄せ書きと異なるのは、それ自体が一つの文学的形式をもち、その場を離れた読者を得ることが可能になっている点である。そうした読者（つまり私たち）にとっては、送別の詩は送り手と受け手のどちらの側にも立つことができ（多くは送り手かもしれない）、あるいはそれを第三者として眺めることもできる。

望郷の詩は、送り手と受け手の間に距離があることが送別とは異なっており、手紙によるコミュニケーションと似たところがあるだろう（実際に、唐代では駅逓制度が発達した）。現代では、こうしたコミュニケーションはメール等の即時性をもつ媒体によって行われることが多く、またスカイプなどを使えば、なおさらであるが、そのことを話題にして、こうした望郷の詩が故郷の人に読まれる可能性がどれほどあったのかについても議論を促すことで、人のコミュニケーションのありかたが時代によって大きく変わっていることに話題を発展させることもできる。

とりわけ「静夜詩」は、故郷の人を思いつつ、故郷にいたころという過去の時間への思いを読み取ることもでき、その読者は、故郷にいる人というよりは、望郷の思いを同じくする者が想定されているとも考えられる。

このように、実際の読者、想定された読者、あるいは想定外の読者のように分類しながら、漢詩の読者の存在に気づかせることができれば、この言語活動の目的は十分に達せられたと言える。

（齋藤　希史）